否定的アイデンティティを有する青年の特徴
—測定指標の開発と，社会的態度・行動との関連—

日原 尚吾
（発達心理学研究室）

本研究の目的は，否定的アイデンティティの測定指標を開発し妥当性を検討すること（研究1，2）と，否定的アイデンティティを有する青年の社会的態度・行動の特徴を明らかにすること（研究3）であった。研究1では否定的アイデンティティの測定指標を開発し，語りの観点から妥当性を確認した。研究2では外的変数との関連性の観点から妥当性を確認した。研究3では，否定的アイデンティティと社会的態度・行動との関連を検討した。研究1，2より，本研究で開発した指標が否定的アイデンティティを適切に測定できることが示された。また研究3から，否定的アイデンティティを有する青年が職業決定および友人関係に問題を抱えることが示された。

否定的アイデンティティを有する青年の特徴
―測定指標の開発と，社会的態度・行動との関連―

心理学専攻　日原　尚吾

問題

社会的に否定的な価値，役割に自分自身を同一化するアイデンティティを，「否定的アイデンティティ」という (Erikson, 1959)。否定的アイデンティティは，例えば，非行集団に所属したり，自分を全く価値のない人間と決めつけたりする生き方としてあらわれる。

否定的アイデンティティは多様な非社会的・反社会的行動の背景要因と考えられ，その学術的・社会的意義が認識されているにも関わらず (三好, 2014), 実証的知見の蓄積は不十分である。この理由として，否定的アイデンティティを測定する指標の妥当性が十分に確認されていないことが挙げられる。そこで本研究では，否定的アイデンティティを客観的に測定する指標を開発し，その妥当性を確認することを第一の目的とする。アイデンティティの全体的な理解には複数の方法論からの多面的なアプローチが有効であるという指摘をふまえ (Vignoles et al. 2011)，半構造化面接により表出される語りの観点 (研究 1) と，質問紙法による外的変数との関連性の観点 (研究 2) から妥当性の確認を行う。

また，否定的アイデンティティは青年期に誰もが陥る可能性のある一般的特性であるとされながら (遠藤, 1981)，従来は犯罪など重篤な問題に至った青年のみを研究対象としてきた。否定的アイデンティを有する一般青年の社会的態度・行動の特徴は解明されていない。現在はまだ比較的軽度な問題であっても，今後更に重篤な問題に発展する可能性があるという点からも，これを明らかにすることは重要である。さらに，従来指摘されてきた彼らの社会的に対する態度や行動の特徴は，少数の事例を対象として記述的に言及されており，知見を一般化することが難しい。以上より，多人数の一般青年を対象として，否定的アイデンティティを有する青年の社会的態度・行動を明らかにすることを第二の目的とする (研究 3)。具体的には，職業領域 (キャリア意識，キャリア探索，職業混乱) ，友人領域 (対人ストレスコーピング) の 2 領域を取り挙げる。

研究 1

否定的アイデンティティの指標である自己定義の社会的否定性得点を算出する方法を開発する。さらに，その得点の妥当性を語りの観点から検討する。

方法

対象者と手続き　広島県内の大学生 44 名（男性 12 名，女性 32 名）を対象に個別面接を実施した。平均年齢は 20.61 歳（$SD = 1.32$）であった。

調査内容　自己定義の社会的否定性の測定には，20 答法 (Kuhn & McPartland, 1954) を用いた。面接項目は Lewis Arango et al. (2008) を参考に作成し，「将来参入すべき大人社会の中で受け入れられやすい肯定的な人間だと思いますか，それとも受け入れられにくい否定的な人間だと思いますか」および追質問「そう思うのはなぜですか」であった。

結果と考察

自己定義の社会的否定性得点の算出　Erikson（1959）の否定的アイデンティティに関する記述から分類基準を作成し，20 答法の記述の内容を肯定，中性，否定カテゴリに分類した。各個人の全記述数に対する否定カテゴリの記述数の割合から肯定カテゴリの記述数の割合を引いた値を，自己定義の社会的否定性得点とした。

面接内容の分類　質問に対して「否定的である」と回答し，かつ追質問に対してそう思う理由を具体的に説明できた者を否定型に，それ以外の者を肯定型に分類した。否定型に分類された者は 9 名 (20.45%)，肯定型に分類された者は 35 名 (79.55%) であった。

妥当性の検討　自己定義の社会的否定性得点の平均値を基準として対象者を高群と低群に分類し，語りの分類（否定型・肯定型）との対応を検討した（Table 1）。フィッシャーの正確確率検定を行った結果，語りの内容が否定型に分類された者は，自己定義の社会的否定性得点の高群に偏って多いことが示された（$p < .01$; $\varphi = .54$）。自己定義の社会的否定性得点の妥当性が語りの側面から支持された。

研究 2

外的変数との関連性の観点から，自己定義の社会的否定性得点の妥当性を検討する。

方法

対象者と手続き　広島県内の大学生 293 名 (男性 186 名，女性 104 名，不明 3 名) に対し集合調査を行った。平均年齢は 20.11 歳 ($SD = 2.95$) であった。

調査内容　①自己定義の社会的否定性：20 答法を使用した。②アイデンティティ達成：三好ら（2003）の Erikson and Social-Desirability Scale 日本語短縮版の内

Table 1

語りの分類との対応の検討 (研究 1)

	自己定義の社会的否定性		
語り	低群	高群	合計
肯定	22	13	35
否定	0	9	9
合計	22	22	44

Table 2

外的変数との対応の検討 (研究 2)

	2	3	4
1. 自己定義の社会的否定性	-.37**	-.36**	.42**
2. アイデンティティ達成		.53**	-.78**
3. 有能感			-.62**
4. 疎外感			

*p < .05, **p < .01

「アイデンティティ達成 vs アイデンティティ拡散」下位尺度 (7 項目，4 件法) を用いた。③有能感：三好 (2003) の主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (6 項目，5 件法) を用いた。④疎外感：宮下・小林 (1981) の疎外感尺度 (44 項目，5 件法) を用いた。

結果と考察

研究 1 と同じ手順で自己定義の社会的否定性得点を算出し，諸変数との順位相関係数を算出した (Table 2)。その結果，理論的に予測される関連のパターンと一貫した関連性が確認されたことから，外的変数との関連性の側面からも得点の妥当性が支持された。

研究 1，2 より，本研究で開発した自己定義の社会的否定性得点は，否定的アイデンティティを適切に測定することのできる指標であることが示された。

研究 3

自己定義の社会的否定性と，社会的態度・行動との関連を検討する。否定的アイデンティティを有する青年は，積極的にキャリア探索を行わず職業未決定状態にあり，友人との関係性を自ら崩壊させやすいと予測する。また，職業領域において自己の適性や生き方を探索することで自分が社会的に否定的であることを再確認し，職業混乱を強めると予測する。

方法

対象者と手続き　広島県内の大学生 145 名 (男性 59 名，女性 85 名，不明 1 名) に対し集合調査を行った。平均年齢は 20.54 歳 (SD = 1.83) であった。

調査内容　①自己定義の社会的否定性：20 答法を使用した。②キャリア意識：キャリア意識尺度 (Adachi, 2006) を使用した。「適職信仰」9 項目，「受身」9 項目，「やりたいこと志向」10 項目から構成される。5 件法。③キャリア探索：キャリア探索尺度 (安達, 2008) を使用した。「環境探索」7 項目と「自己探索」6 項目から構成される。5 件法。④職業混乱：職業未決定尺度 (1 下山, 1986) の内「職業混乱」下位尺度 (6 項目; 5 件法) を使用した。⑤対人ストレスコーピング：大学生用対人ストレスコーピング尺度 (加藤, 2001) を使用した。「ポジティブ関係コーピング」16 項目，「ネガティブ関係コーピング」10 項目，「解決先送りコーピング」8 項目から構成される。4 件法。

結果と考察

自己定義の社会的否定性と諸変数の順位相関係数を算出した。自己定義の社会的否定性は，環境探索 (ρ = -.32; p < .01) および自己探索 (ρ = -.17; p < .05) と負の，職業混乱 (ρ = .34; p < .01) およびネガティブ関係コーピング (ρ = .17; p < .05) と正の相関を示した。

さらに，否定的アイデンティティを有する青年においては，自己探索が職業混乱を強めるという仮説を検証するために，自己定義の社会的否定性，自己探索，およびそれらの交互作用を説明変数とし，職業混乱を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果，自己定義の社会的否定性 (β = .33; p < .01)，自己探索 (β = .22; p < .05)，交互作用 (β = .16; p < .05) の影響が有意であった。交互作用の下位検定を行ったところ，自己定義の社会的否定性高群においてのみ自己探索の単純傾斜 (β = .41; p < .01) が正に有意であった。

以上より，否定的アイデンティティを有する青年が，職業領域と友人領域において社会的態度・行動に問題を示すことが明らかになった。また，否定的アイデンティティを有する青年では積極的な自己探索が職業混乱を強めることに結びつくことが示唆された。

総合的考察

研究 1，2 より，本研究で開発した自己定義の社会的否定性得点の妥当性が，語りおよび外的変数との関連性の両方面から確認された。これにより，否定的アイデンティティを有する可能性の高い者の抽出や，多人数を対象とした他の変数との関連の検討が可能となった。今後の実証的知見の蓄積に貢献すると期待される。

研究 3 では，否定的アイデンティティを有する青年が，職業選択や友人関係など多様な側面での社会との関わりにおいて問題を抱えていることを初めて実証的に明らかにした。特に，否定的アイデンティティを有する青年では職業の適性や自分の生き方について考えることが職業混乱を強めていた。こうした青年が効果的な職業探索を行えるよう促す教育的・臨床的支援が必要であるといえよう。

本研究は否定的アイデンティティの実証的研究を前進させる素地を整えた研究と位置づけられる。今後は，否定的アイデンティティが形成・維持されるプロセスの解明など，より発達的な研究への展開が期待される。

(主任指導教員：杉村和美
副指導教員：森永康子，中島健一郎)